



「みんなで育てよう！」

～身近なところから支え合う～

社会医療法人真美会

中野こども病院理事長 木野 稔

中野こども病院は小児科専門の民間病院で、昭和41年（1966年）に創立されましたので、今年で53年目を迎えています。その間、時代とともに社会や生活スタイルは変わり、子ども達を取り巻く環境もずいぶん変わりました。

日本の育児環境の現状を見てみますと、少子化とともに核家族化が進む一方で、近所付き合いが少なくなりました。また、インターネットの普及により、情報量が格段に膨れ上がっていますが、育児情報が氾濫する反面どれが正しい情報で、どれが間違った情報なのか判断にとても迷います。さらに、女性の社会進出の増加に伴う保育所不足や、非正規雇用者の増加による子供の貧困など課題が山積しており、子供を育てにくい環境になっています。

一方、子供自身は、こういった環境で育てられることに、大きく影響を受けています。環境が子供の成長へ与える影響は、親が想像する以上ですので、この点をしっかりと認識する必要があると思います。育児放棄や虐待につながる一歩手前という事態もありえます。現在は、子育てを行う親や当事者の努力だけでなく、社会で支えていく必要があります。この社会で支え合うことと親を育てることに力を入れないと、育児の本来の目的を達成することができないだろうと思います。

私は四十年以上小児科医として働いていますが、育児が将来の日本の行く末を決める重要な問題であることを実感しています。そもそも、子育てには育児の原理と言えるものが二つあると私は考えています。一つ目は、子供が社会で自立できるように育てること。二つ目は、子供が幸せな人生を送れるように育てることです。この二つの非常にシンプルな原理を守ることが、育児をする親の責任であり、支える目的でもあるのです。

日本の育児環境の現状

1. 核家族化 (両親が一人でガンバるしかない)
2. 少子化 (子育て経験が少ない)
3. 地域社会における相互扶助機能の崩壊
4. 情報化社会 (理想?の子育て、競争社会)
5. 就業形態の変化と格差
(キャリア形成、非正規雇用、相対的貧困)

↓

子どもを育てにくい環境

子どもの成長(社会性や対人関係能力等)への影響は?

育児の原理

- ◆ 社会で自立できるように
- ◆ 幸せな人生を送れるように

育児不安

- ◆ 吾子に対する畏れ「いいしれぬ不安」
- ◆ 育児情報の氾濫 世代間非伝達 ⇨ 育児混乱 (親を育てる)
- ◆ 育児力の不足 育児放棄、虐待 ⇨ 育児無知 (社会で支える)

子育ては、親育ち
育てたように子は育つ

子供は多くの人と関わり、いろんな大人の中で育てられることで、社会性や適応力を学びながら発達します。また、日常感染症にかかり、小さなケガを体験しながら成長していきます。

しかし、病気という苦痛や不安に対処するには、普段から親の愛、社会の見守りを十分に受けていたとしても専門職の支援が必要です。病気や困難を乗り越えた時には、抵抗力と免疫が身についていることを親子で確認し合ってほしいと願います。小児医療の専門職が支援する視点はそこにあるといっても過言ではありません。一方では、病気から回復して元気になっても、家庭や保育園・幼稚園、学校に戻る際に気を付けておいてほしいことがあります。また、病気や体質、特性と付き合いながら日常生活を行わねばならない場合もあります。そのような時、病院は家庭だけでなく園や学校と連携する必要があります。小児医療は病院内だけで完結するものでなく、地域の諸機関、団体、そしてご近所の方々などと連携しなければならないとも言えます。

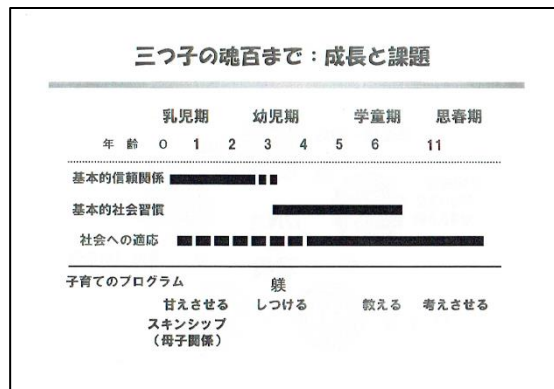
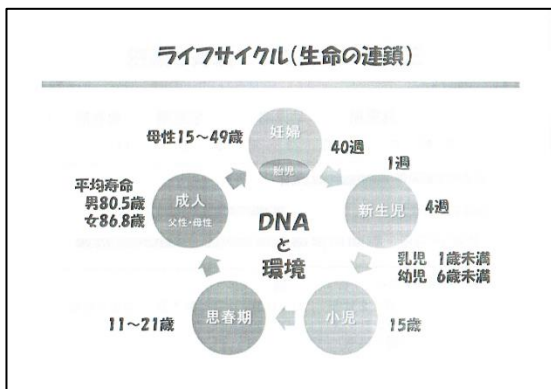
子供の特徴は一体何なのか。一言で言うと「未熟です」、しかしそれだけではなく、時々刻々と成長発達過程を邁進しています。日々成長、発達して大人になったら終わりではなくて、最近では、ライフサイクル（生命の連鎖）を考えて医療を行うようになってきました。

ライフサイクルというのは、次のようなモデルで考えます。まず、胎児が妊婦の中で四十週間かけて成長し、母体の外へ出産されます。生後一週間は早期新生児と言います。おっぱいを飲んで一歳までを乳児。小学校に入るまでを幼児。小児期は十五歳までですから、小児科は十五歳までの医療を対象にしています。それから思春期は十一歳から二十一歳。これには個人差があります。

そして、成人になると、男性は八十一歳、女性は八十七歳が平均寿命です。これは毎年、延びています。そして、成人になった方がまた子供をつくっていく、その母性の期間が十五歳から四十九歳までになっています。こういったライフサイクルで考えることが医療の分野で、主流になっています。DNA（遺伝子）が発見されてから、遺伝の様式や分子的な構造がいろいろわかってきましたが、このライフサイクルの中であって、長らくDNAは変わらないと言われてきました。しかし、環境によって、DNAの働き方が変わることが近年の研究で明らかになってきました。

つまり、遺伝子にはその遺伝情報を働かすかどうかのスイッチがあり、それが環境の影響を受けて、オン・オフされるのです。それによって、子供の育ち方も大きく変わります。その変わり得る時期はいつかと言えば、胎児から二歳くらいまでの成長、発達が一番著しい時期です。


大事なところは大体、〇歳から一歳まで。「三つ子の魂百まで」という言葉がありますが、この三つ子というのは数え年なので、〇歳から二歳までが大切ということです。この時期の環境が大切であることは、アメリカの心理学者であるE・H・エリクソンが発達心理学の中で明らかにしています。まず基本的な信頼関係をつくったうえで、社会への適応、それから社会習慣を身に付けていきます。つまり、母子の愛着形成が大切で、これができて初めて、先の段階へ進めるのです。この愛着の関係ができてから、子供の自律を促すことになります。



自律と同時に、良い習慣を付けることがしつつけです。「躰」という字を使う時は所作たしなみの意味になりますが、「仕付け」という言い方もあります。裁縫などで仕上がりがおかしくならないように基盤を作っておくことです。私は仕付けという字の方が育児にあてはまるのではないかと思います。しつつけることができたなら、今度は自主性を育みます。自分で取り組むことができるようになれば、教えることができます。教えて勉強することができたなら、今度は考えさせることができます。

これが、自己の確立・自立ということです。上記のことは、年齢が全てではなく、子供が育つ上でこれらの順番が大切ということです。プログラムと言ってもよいですが、課題を順番にこなしていくということです。一足飛びに急いでもいけませんし、問題があれば元に戻って対処すればよいということです。

しつつけ 【躰・仕付け】



1. 礼儀・作法を教え込むこと。
2. 裁縫で縫い目がくわらないように、仮にざっと縫い付けておくこと。

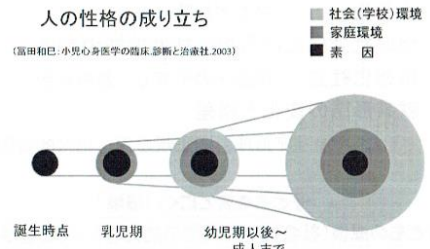
- ✓ 所作・たしなみのこと。
- ✓ 仕上がりがおかしくならないように基盤をつくっておくこと。

押しつけ？説教？

**子どもは素質を基盤に
環境との相互作用で成長する**

人の性格の成り立ち

(高田和巳・小児心身医学の臨床・診断と治療社2003)



■ 社会(学校)環境
■ 家庭環境
■ 素質

誕生時点 乳児期 幼児期以後～成人まで

育児を支援するため、みんなで育てようと言ってもポイントをはずしてはいけません。まずは、子供の特徴と心身の発達の仕方を理解することです。社会が変わっても、変わらず大切なものがあります。社会で自立できるように、幸せな人生を送れるようにという育児の原理をしっかりと共有します。複雑な要素がたくさんあっても、いつも何が一番大切かを考えて対処するとシンプルになります。

人にはそれぞれ個性と特性があります。学校、社会生活の中でストレスも多いですが、ストレスに対処する力を保つなどのバランス感覚が大切です。ストレスに対処する能力で一番重要なのが、乳幼児期の母子関係を基礎とした社会的信頼関係なのです。孤立しないように身近なところから支え合うことです。

子供は常にポジティブです。環境さえ適していれば可能性は無限に近いです。子供によい環境を与えることが、大人の責務です。ライフサイクルにおける家族の絆を大切にして、社会みんなで温かく見守り、育てていきたいものです。

みんなで育てよう

1. 日本の育児環境
子育ては親育ち、社会とともに環境も変わる
2. 育児の原理
社会で自立できるように(自立とは自己肯定)
幸せな人生を送れるように
3. 混乱・無知から安心へ
子どもの特徴(心身の発達)を理解する
変わりゆくもの、変わらず大切なものがある
4. いつも何が一番大切かを考えて対処する
5. 孤立しないように身近なところから支え合う